經濟研究

第9巻 第4號

October 1958 *Vol.* 9 *No.* 4

『経済表』(原表)の構想

渡辺輝雄

I

周知のように，マルクスは『反デューリング論』や『剰余価値学説』においてケネーの『経済表』の比類のない優れた解説を与えている。この解説によって『経済表』は初めてその経済学上の意義を闡明にされ，経済学史上におけるその占むべき正当な地位に置かれることとなったのである。しかしながらこのマルクスの優れた解説も，ケネーの経済表といわれるもののうち「経済表の範式」Formule du Tableau économique と呼ばれるものに限られ，tableau fondamental, grand tableau 或は zigzag などと呼ばれるいわゆる経済表「原表」には及んでいなかった。

アウグスト・オンケン August Oncken は，有名な『国民経済学史』において，マルクスの『経済表』研究を批評し，マルクスがその研究に用いている『経済表の分析』は，本来の経済表である原表を含んでおらず，元来『農業哲学』において間に合わせに利用されたものにすぎない「略表」tableau abrégé しか含んでいないから，経済表の完全な理解には不充分だと述べている[1]。オンケンによれば，範式は，原表全体の代りに，単にその最初のジグザグを模写したものにすぎなかったのである[2]．オンケンは経済表を単に人体の内部構造，特に血液の循環との類推においてのみ把えていた[3]。恐らくそのために彼は，複雑なジグザグをもつ原表こそが本来の経済表であり，その完全形態であって，簡単な範式はその省略されたものにすぎないと考えてしまったのである。周知のように，範式は，社会的総資本の完結した再生産過程，すなわち完全な経済の循環過程を表示したものである。しかるに，オンケン自身の解説でもわかるように，原表は，少くともその表面に表示された限りでは，社会的資本の再生産過程の未完結な表示にすぎず，そこでは経済の循環過程はいまだ完全には表示されていないのである[4]。だから唯一の正しい観点，経済学の観点からは，むしろ範式こそが経済表の完成形態であり，原表はその未完成形態でなければならなかったのである。

しかるに最近，範式に対する原表の欠陥，すなわち社会的資本の再生産過程の不完結を，原表に対するオンケンの解説の欠陥と看做し，これを是正して原表の一層完全な解説を行おうとする新し

1) Cf. A. Oncken, *Geschichte der Nationalökonomie*, Leipzig, SS. 386—7.

2) Cf. *ibid.*, S. 396.

3) Cf. *ibid.*, S. 394.

4) Cf. *ibid.*, S. 395.

い試みがあらわれている。発表順に挙げて，渡辺建氏，越村信三郎教授，ヘンリー・ウーグ博士(Dr. Henri Woog)，坂田太郎教授の試みがそれである。これら4氏のうち越村，ウーグ両氏は，範式の立場より，範式にあって，しかも少くとも原表の表面に欠けている要素を原表に持込み，これによって原表の社会的資本の再生産過程を完結したものとして説明している[5]。これら両氏に対して，渡辺，坂田の両氏は，範式を前提せず，むしろ原表に則してこれを合理的に解釈しようと努力しているのであるが，しかしこれら両氏も，原表に，それに表示されていない流通，すなわち生産的階級からの不生産的階級の一方的な農産物の購買を補い，それによって社会的資本の再生産過程を完結したものとして説明している点では，さきの両氏と全く軌を一にしていたのである[6]。

一体，原表は，このように裏面の流通の補充によって解釈することを許されるものであろうか。われわれはこの点を検討しながら，進んで経済表原表がどのような意味をもったものであったかを明らかにすることとしよう。

II

ケネーは，『経済表』第2版の「経済表の説明」において，経済表を説明し，地主がその年収入の半額をパン，葡萄酒，肉類等の農産物に対して，「生産的支出の階級」classe des dépenses productives に，他の半額を衣服，家具，什器等の工業製品に対して，「不生産的支出の階級」classe des dépenses stériles に支出するとすれば，年々同額の収入が更新されることになるが，これに反し，もし「これらの支出が，それをなす者の生活資料の奢侈または装飾の奢侈に耽る程度の大小に応じ，一方または他方において，多額となりまた少額となる」ことになれば，「収入の再生産」にも変化が生ずると述べていた。

彼によれば，たとえば今「装飾の奢侈が地主にあって6分の1，工匠において6分の1，耕作者において6分の1増加するものと仮定すれば，600 リーヴルの収入の再生産は，500 リーヴルに減少するであろう」し，「その反対にもし支出の増加が，粗生産物の消費，または輸出の側において，この程度に達したとすれば，600 リーヴルの収入の再生産は，700 リーヴルに，かくて累進的に，上昇するであろう」というのである[7]。

ケネーはこのことをこれ以上そこで説明していない。しかし幸いわれわれは，この「経済表の説明」に欠けている一層詳細な説明を，ミラボー (Mirabeau) がケネーの協力を得て著した『人間の友』第6巻の続巻『解説附経済表』のうちに，見出す。ミラボー(＝ケネー)は，彼の言うところの「変調における経済表[8]」の研究にあてられている同書の第2部の冒頭に，「均衡を失っている」1枚の経済表を掲げている[9]。

経　済　表

便宜のために，上にその概要を示した表を掲げておこう。彼によれば，この表は，「装飾の奢侈が，地主にあって6分の1だけ増加するということ，すなわち，地主が不生産的支出の側に87リーヴル多く注ぎ込むということ」を仮定したものである。この仮定は，「この欄に612リーヴル10ソルをもたらし，反対に生産的欄を437リーヴル10ソルに縮少する。」しかるに「風習というものは，反射作用によって，すべての階級において相互に模倣され合い，吸収され合うものである」。従って「この6分の1の変革は，工匠においても，また耕作者においても，同じことを行うことになるであろう」。かようにして「この新しい取りきめに従って，表の進行を辿れば」，表の下部におい

5) 越村信三郎『ケネー経済表研究』113 以下，119, 123, 124, 125頁；Henri Woog, *The Tableau Economique of François Quesnay*, 1950, pp. 60, 61, 73—4, 78. 参照。

6) 渡辺建「経済表註解」『三田学会雑誌』第38巻第3・4号 111 頁；坂田太郎訳『ケネー経済表』「解説」46—49 頁参照。

7) Cf. Quesnay, *Tableau Oeconomique*, reproduced in facsimile for the British Economic Association, 1894, p. i-ii；坂田訳『ケネー経済表』25—26 頁参照。

8) Mirabeau, *L'Ami des hommes*, suite de la sixième partie, Tableau Oeconomique avec ses Explications, 1760, p. 101.

9) *Ibid.*, p. 101；坂田訳書，附録 Figure 5 参照。

て「1050 リーヴルの総収入の再生産が，1050 リーヴルの代りに，915 リーヴルに減少し，また 1655 リーヴルの農耕者の回収は，1442 リーヴルに縮少されている」ことを見出すであろうというのである[10]。

これには少し説明を加える必要がある。原表におけるケネーやミラボーの仮定に従えば，生産的階級に移った貨幣は，そこで「前払をもたらし」，すなわちそこで投資されて，単にこの「前払」部分を再生産するのみならず，さらにそれと同額の「純所産」produit net すなわち剰余価値部分をも生産する[11]。だから地主が 1050 リーヴルの年収入を折半して 525 リーヴルづつ均等に支出するのでなしに，不均等に，不生産的階級にその工業製品を買うために 6 分の 1 だけ多い 612 リーヴル 10 ソルを，生産的階級にその農産物を買うため 6 分の 1 だけ少い 437 リーヴル 10 ソルを支出するとすれば，単にこの初めの支出だけですでに再生産に次の相違が生ずることになる。すなわち，地主の収入が均等に折半されて，生産的階級に支出される部分が 525 リーヴルの場合には，生産的階級の「前払」も 525 リーヴルであり，従って「純所産」も 525 リーヴル，だから総生産額は，これに「前払」の「回収」部分 525 リーヴルを加えて，1050 リーヴルであるのに対して，生産的階級に支出される部分が 437 リーヴル 10 ソルに減少すれば，生産的階級の「前払」も 437 リーヴル 10 ソルに減少し，従って「純所産」も 437 リーヴル 10 ソルに，だからまた総生産額も 875 リーヴルに減少することになる。すでに収入の最初の支出で再生産にこれだけの相違が生ずるのであるが，その後における生産不生産両階級間の相互流通を通じて生産的階級に廻流する金額による再生産についても同様である。この場合大切なことは，生産不生産両階級における農産物と工業製品とへの支出，従って生産的階級と不生産的階級とへの支出が，地主の「風習」mœurs を模倣して，つねに地主の場合と同じ比率で行われるということである。かくて全体として生産的階級への廻流額は，均等支出の場合の 1050 リーヴルから 915 リーヴルに減少するのであり，従って「年前払」および「純所産」もそれぞれ 1050 リーヴルから 915 リーヴルに，さらに再生産総額も 2100 リーヴルから 1830 リーヴルに減少することになる。さきのミラボーからの引用に，「1655 リーヴルの農耕者の回収は，1442 リーヴルに縮少されている」とあるのは，右の「年前払」の回収部分に，さらに彼のいわゆる「農耕者の年前払および原前払の利子」なるものが加えられているからであって，これは経済表によると，前の場合で 605 リーヴル，後の場合で 527 リーヴルとされる。これを加えれば，総再生産額もそれぞれ異って，2705 リーヴルから 2357 リーヴルに減少することになることはもちろんである[12]。

ミラボーはさらに，地主がケネーのいわゆる「生活資料の奢侈」に耽る場合にも触れている。彼によれば，「もし反対に支出の増加がこの度合で粗生生産物の消費または輸出の側にもたらされるとすれば，1050 リーヴルの収入の再生産は，1146 リーヴルに達し，また 1655 リーヴルの農耕者の回収は，その場合 1806 リーヴルとなるだろう。だからそれは 151 リーヴルだけ増加したのであり，従って総増加は 247 リーヴル，すなわち約 10 分の 1 であろう」というのである[13]。これは，もちろん，地主の収入の支出に応じて生産的階級の手に廻流する貨幣額が多くなる結果であって，われわれはもはやそのことをここで繰返して説明する必要はなかろう。

さて，地主の「装飾の奢侈」および「生活資料の奢侈」による再生産の変化というケネーの思想がこのようなものであり，しかもこの思想は，彼の原表の構想の不可欠の一部をなしていたことを知るならば，われわれは必然的に，原表は，これに裏面の流通を想定し，その社会的資本の再生産過程の完結を求める試みを拒否していると考えなければならないであろう。そこではかかる合理性は放棄されていたのである。何んとなれば原表の裏面において不生産的階級の生産的階級からの一方的購買を仮定することは，原表における基本的前提，すなわち，あらゆる階級はその「支出」において，地主の「風習」に従うのであって，地主の収入の生産不生産両階級への支出の割合は，両階級に赴く貨幣額を決定し，従って生産的階級にお

10) Cf. *ibid* p. 104.

11) ケネーは『経済表』第 2 版の「経済表の説明」において，「表の秩序において生産的支出に移った 300 リーヴルの収入は，そこで貨幣で前払をもたらし，この前払は，地主の収入の再生産の一部をなす 300 リーヴルを純粋に再生産する」と述べている。(Quesnay, *op. cit.*, p. ii；坂田訳書 26 頁。)

12) 「年収入」1050 リーヴルの均衡表 (Mirabeau, *op. cit.*, p. 51；坂田訳書 Figure 4) および同不均衡表 (*Ibid.*, p. 101；坂田訳書 Figure 5) の脚註参照。

13) Mirabeau, *op. cit.*, pp. 104—5.

ける「前払」を決定し，「純所産」および総生産高の再生産を決定するという前提と矛盾し，これを破壊することとなるからである。この前提を生かす限り，裏面の流通の想定は放棄されなければならない。逆に裏面の流通を想定して，原表の合理性を求めようとすれば，原表の基本的前提が放棄されなければならない。この後の点はずでに，不均衡表によってケネーが主張しようとした事実は成立ち得ないという形で，柴田敬教授によって鋭く指摘されていた。教授によれば，それは，ケネーの「単なる思い違い」であった。そして「経済表の謎」は実にそこにあったというのである[14]。私は，この教授の指摘は大筋において正しかったと思う。

III

思うに，均衡表および不均衡表を含む原表の中心思想をなすものは，地主の収入の支出の如何が，国民的再生産を，従ってその単純，縮少，拡大の相違を決定するということであった。この思想は，地主の〔支出の〕「風習」は他の諸階級によって模倣されるという前提に支えられていた。原表は，このような思想を中心としたケネーの独特の構想を図表化したものであって，一般に『経済表』が再生産の体系を表示したものであったとしても，原表が表示しているのは，範式におけるような，単なる国民的再生産の体系ではなく，「支出」dépense，特に地主の収入の支出を中心とした特異な再生産の体系であったのである。これは，原表の理解にあたって，われわれが特に留意しなければならない点である。

かかる原表の特異な性格を明瞭にするために，われわれがまず指摘しなければならないのは，原表の学史的系譜についてである。他の社会諸階級によって模倣される地主の収入の支出における変化が，国民経済全体の変化を決定するという思想は，実は，別の形でではあったが，ケネー以前にすでにリチャード・カンティロン Richard Cantillon に存在していた。

カンティロンによれば，「土地の生産物の3分の1を自由にすることのできる地主は，消費に起り得る変化の主役である。その日暮しをする農耕者や工匠は，ただやむを得ずその生活様式を変えるにすぎない。もしその支出や消費の変わる若干の裕福な借地農業者 Fermiers や，親方工匠や，その他の企業者があるとしても彼等はつねに貴族や土地所有者を手本とし，その衣服において，その料理において，またその生活様式においてこれらの者を模倣する[15]」。従って，「君主および主として土地所有者の気分，風習ならびに生活様式は，1国における土地の使用法を決定し，且つ市場においてあらゆる物の価格の変動を惹起す[16]」というのである。

この思想は，絶対主義のフランスにおいて，しかも絶対主義の保護の下に，経済学研究を行っていたケネーにとって，魅力ある思想であったに相違ない。ケネーは，恐らく，この思想をカンティロンから学んだのである[17]。そして彼はこれに，彼がマーカンティリズムに対する批判を通じて獲得した再生産の思想[18]を結びつけた。原表における独特の思想体系は，かくして創造されたものと考えられるのである。

それならばカンティロン的思想と再生産の思想とは原表においてどのように結びつけられていたのか。この点を明らかにするために，われわれはまず，ミラボー(＝ケネー)が『解説附経済表』において貨幣について次のように言っていることに注意しよう。

「……貨幣は貨幣を産まない。巧みに使われた1エキュは，成程，2エキュの富を生ぜしめることができる。しかし増殖したのは，貨幣によって獲得された富であって，貨幣ではない。貨幣が富を再生させるのは，ただ富に報いるに富を以ってすることによってにすぎない。従って貨幣は不生産的な手 mains stèriles に滞

14) 柴田敬「ケネーの経済表の《謎》について」『山口経済学雑誌』第7巻第5・6号参照。

15) Richard Cantillon, *Essai sur la natnre du commerce en général*, 1755, pp. 82—3. 戸田正雄訳『カンティヨン商業論』52頁。

16) *Ibid.*, p. 75; 戸田訳書48頁。

17) ただ，カンティロンにあっては地主以外の階級は単にその支出の変化し得る部分についてだけ地主を模倣するにすぎなかったのに，ケネーにあってはこれらの階級はその全「支出」において地主を模倣するものとされている違いに注意しなければならない。

18) 渡辺輝雄「ケネーにおける《国富》の見解について」III，IV，『東京経大学会誌』第18，19号参照。

留してはならない。

それ故，貨幣がピエールのポケットに入るか，ポールのポケットに入るかということは，1国にとって一般に信じられているようにどうでもよいことではない。何故ならば，貨幣が，それを国家の利益のために使う人から奪われないことが肝要なことだからである[19]。」

この引用の前半は，貨幣についてのケネーの反マーカンティリズム的思想を述べたものであって，「貨幣自身はなんら価値増殖を行うものではなく，それは単に，《富》の再生産の契機をなす商品流通の媒介手段にすぎないから，決して蓄蔵されてはならない」ということを言っているのである[20]。われわれの問題は，むしろこの前半との関連における後半の主張である。ここでは，「だから，貨幣が誰の手に渡るかは，重大なのだ」と言っているのである。これはさしあたって，上からの続きで，貨幣が貨幣蓄蔵者(ケネーは，「大商人」gros marchands や「割引業者」escomteurs 等もかかるものに属すると考えていた[21])の手に渡るということは，富の再生産を妨げるから，重大だという意味でなければならない。しかしミラボー(＝ケネー)はここで，単にそれだけのことを言おうとしていたのであろうか。周知のように，ケネーやミラボーの見解によれば，独り農業生産者のみが，「富」を「生産する」唯一の生産者の階級であった。工業生産者は単に農業で生産された「富」を変形するにすぎず，従って彼等は，商人達と共に「不生産的階級」をなしていた。今この見解に従って，貨幣が農業者の手に渡るか，それとも商工業者の手に渡るかを，その直接的結果において考えれば，両者の間には「富」の再生産について決定的な相違が生ずることとなる。すなわち，農業生産者は，その手に渡った貨幣を「前払」(投資)して，換言すれば，生産資本に転化させて，「富の生産」を行うことができるのに反して，商工業者にはそれができないからである。もちろん，これは，われわれがケネー自身の見解に従って，これをその窮極的結果において考えれば，事情は違ってくる。ケネーの見解によれば，社会の一切の「富」の源泉は農業にあるのだから，貨幣は，「富」の流通を媒介して，結局は農業生産者の階級の手に廻流しなければならない。だからこの原則に従って窮極的に考えれば，貨幣が農業者の手に渡るか，商工業者の手に渡るかということは，結局，貨幣が農業生産者の手に直接的に渡るか，間接的に渡るかの相違にすぎず，従ってそこには社会の「富」の再生産上の相違というものは，何もない筈だからである。しかしケネーは，原表の構想に際しては，このように考えることができなかった。彼はカンティロン的思想に囚われており，生産的階級(農業生産者)および不生産的階級(商工業者)に渡った貨幣は，つねに地主の場合と同一比率で，農産物と工業製品とに支出されるものと考えていたからである。この場合には，貨幣はどこまで行っても農業生産者の手に廻流することにはならず，従って貨幣が農業者に渡るか商工業者に渡るかによって，「富」の再生産に相違が生ずることになる。貨幣が誰の手に渡るかは決してどうでもよいことではない。ミラボー(＝ケネー)は上の引用で，恐らく，貨幣が，単に貨幣蓄蔵者ばかりでなく，さらに他の商工業者も含めたすべての「不生産的な手」に渡るかどうかを「富」の再生産という観点から問題にしていたのである。

だから原表におけるケネーやミラボーにとっては，「支出の種類はどうでもよいというのは，ほんとうではない[22]」ということになる。支出は，それが農産物に対してなされるか，それとも農産物以外の例えば工業製品に対してなされるかによって，「富」の再生産に異った結果をもたらすものとして，区別されなければならない。原表の仮定に従えば，前の場合には，支出された貨幣は，農業生産者の手に渡って，そこで全額投資(「前払」)され，この投資額(「前払」)に100パーセントの

19) Mirabeau, *op. cit.*, p. 149.

20) この引用の前半と殆んど同じ文章が，ケネーの「箴言に関する註釈」第13の続きに出ている(Quesnay, *Oeuvres*, p. 349；坂田訳『ケネー経済表』197頁)。この解説の詳細については，渡辺「ケネーにおける《国富》の見解について」III『東京経大学会誌』第18号，特に95頁参照。

21) 渡辺「ケネーにおける《国富》の見解について」III『東京経大学会誌』第18号91頁参照。

22) Mirabeau *op. cit.*, p. 106.

「純所産」を加えた額の「富」を再生産するのに，後の場合にはそれが行われ得ない。ここから，農産物の購入のための支出を「生産的支出」dépense productive 或は「再生産的支出」dépense reproductive と呼び，工業製品の購入のための支出等，それ以外の支出を「不生産的支出」dépense stérile と呼ぶ，原表における支出の区別が生じたのである[23]。

「生産的支出」と「不生産的支出」の支出の両区分は，カンティロン的思想の影響のもとに支出と再生産とを結びつけた原表独特の範疇であった。カンティロン的思想と反マーカンティリズム的再生産の思想とは，この支出の両区分のうちに結びつけられていた。地主の収入の支出の如何は，他の社会諸階級に模倣されて，社会全体の「支出」の如何を，すなわちその「生産的支出」と「不生産的支出」とへの分割の割合を決定し，かくして社会の「富」の再生産を決定する。社会の「富」の年々同額の再生産，すなわち単純再生産のためには，年々同額の「前払」が行われなければならないのであるが，そのためにはまたそれと同額の貨幣が年々農業生産者の手に廻流すること，すなわち年々同額の「生産的支出」の行われることが保証されなければならない。原表におけるカンティロン的前提に従えば，均等折半による他の両階級への地主の収入の支出は，かかる同額の「生産的支出」，従って年々同額の「富」の再生産を保証するのである。これに反し，地主の収入の支出が「生産的支出」よりも「不生産的支出」において勝る場合には，社会全体の「生産的支出」が減少し，従って社会の「富」の再生産も減少するのであり，また地主の収入の支出が「不生産的支出」よりも「生産的支出」において勝る場合には，社会全体の「生産的支出」が増加し，従って社会の「富」の再生産も増加することになるのである。

さて，以上われわれは，原表が，範式とは異る独特の構想を図表化したものであることを明らかにしたが，かかる独特の構想を図表化したものとしては，原表はむしろ極めて適確な構成をもっていたと言うことができる。それ故，その表示する社会的再生産過程の不完結という欠陥が原表にあるとしても，それは，表現様式としての原表の欠陥ではなく，原表の表示する思想内容自身の欠陥でなければならない。この点が顧られないところに，原表は，これを裏面の流通で補完して初めて，正当に理解され得るのだとする見解が生ずるのである。それならば，原表の表示する思想内容の欠陥は一体何処にあったのか。

IV

社会全体の支出すなわち消費の変化は，社会における諸欲望の変化，諸種の使用価値(生産物)に対する需要構成の変化を意味するが，かかる需要構成の変化は，或る種の生産物に対する需要を増大させ，この生産物の価格を騰貴せしめ，反対に他の種の生産物に対する需要を減少させ，この生産物の価格を下落させる。しかるにこの需要構成の変化によって惹起される価格の変動は，需要の増大した生産物を生産する生産部門或は個別資本(個々の企業)においてその生産を拡大することを可能にし，需要の減少した生産物を生産する生産部門或は個別資本においてその生産を縮少することを余儀なくする。だから，支出の如何が再生産の如何(その単純，縮少，拡大)を決定するという原表の主張は，個々の生産部門或は個別資本については或る程度妥当性をもった主張であったと言うことができる。ケネーやミラボーは明らかにこの見地から問題を把えていた。ミラボー(＝ケネー)は，『解説附経済表』において，次のように述べている。

「第1次的欲望の生産物の不断の且つ変らない高価によってひとが獲得するのは，この後の方の効果であ

23) ケネーはこれら両者を次のように説明している。「生産的支出は，富を永続させるために，穀物，飲料，木材，家畜，手工業製品の原料等に対して，農業，秣場，牧場，森林，鉱山，漁業等に用いられる。不生産的支出は，手工業商品，住居，衣服，金利，僕婢，商業の経費，外国の生産物等に対してなされる。」(Quesnay, *Tableau Economique*, in facsimile, p. i. 坂田訳書25頁。) この引用では「富を生産する」産業のうちに農業のほかになお「牧場，森林，鉱山，漁業等」が含まれている。われわれはこれを農業に代表させているのである。「不生産的支出」についても，工業製品の購入のため以外の「支出」が含まれているが，これも工業製品の購入のための支出に代表させた。

り，そしてそれらの生産物を低い価格に維持しようと狙うめくら共が，知らずに，国民の収入および生活資料に火災を持込むのは，さきの〔効果〕によってである[24]。」

ここに，「この後の方の効果」とあるのは，「支出の増加」が「粗生生産物の消費或は輸出の側にもたらされる」場合に，収入および総生産高が拡大再生産されることを指しており，「さきの〔効果〕によって」とあるのは，反対にいわゆる「装飾の奢侈」によってそれ等が縮少再生産されることを指しているのである。つまり，ケネーやミラボーは，農産物への支出の増大は，その農産物の価格を恒常的に高価ならしめ，「前払」の拡大，従って再生産の拡大を可能ならしめるが，反対に農産物への支出の減少は，その価格を低廉ならしめ，「前払」の縮少，従って再生産の縮少を余儀なくすると考えていたのである。

もちろん，各生産部門や個別資本にとって，拡大再生産は，一方における需要の増大が他方におけるその減少を前提する社会の需要構成の単純な変化によってのみ行われるのではない。むしろ反対に，それは，かかる単純な需要構成の変化を前提せずに，換言すれば，価値以上への価格の昂騰を前提せずに，価値通りの販売によってそこで獲得される剰余価値の資本への転化によって行われる。しかしケネーにおいては，個人的消費を行うにすぎない地主のみが，「純所産」すなわち剰余価値の唯一の収得者なのであって，需要構成の変化を前提しない限り，個々の生産部門や個別資本家のもとには，追加資本に転化すべき何らの剰余価値も残らなかった。ここから彼は，カンティロンの思想に影響されて，ただ地主の支出の如何が再生産の如何を，すなわちその単純，縮少，拡大を決定するとのみ考えてしまったのである。

しかし支出の如何が再生産の如何を決定するという思想は，個々の生産部門や個別資本にとって或る妥当性をもつとしても，社会の総生産或は社会的総資本にとっては，決して当てはまらないということに注意しなければならない。単なる社会の支出或は消費の変化による或る生産部門或は個別資本の再生産の拡大或は縮少は，必ず他の生産部門或は個別資本の再生産の縮少或は拡大によって相殺されるのであって，社会全体或は社会的総資本の再生産としては拡大も縮少もない筈だからである。確かにケネーも，農業生産の拡大或は縮少は，反対にそれに相応する工業生産の縮少或は拡大を伴うものと考えていた。しかし同時に彼は，一切の富の源泉は農業にあるのだから，農業生産の拡大或は縮少は，結局工業生産部門をも拡大或は縮少させ，従って社会の総生産をも拡大或は縮少させるに至るのだと考えてしまったのである。ケネーは考え違いをしていたのだ。すべての富の源泉が農業にあるとすれば，支出の変化によって生ずるのは，高々農業部面で生産される生産物の種類の変化にすぎない。その点，地主の支出の変化は，諸生産物の市場価格の変動と「土地の使用法」を決定するというように把えたカンティロンの方が，むしろ正しかったと言うことができる。要するに，ケネーは原表において，個々の生産部門或は個別資本についてのみ或る程度妥当することを，彼の立場から言えば，農業部面内部の個々の生産物の生産についてのみ或る程度妥当することを，農業部面全体についても，従ってまた社会全体或は社会的総資本についても当てはまるものと間違って考えてしまったのである。

周知のように，原表は，範式が「再生産総額」50億リーヴルという規模の社会的総資本の再生産過程を表示しているのに対して，オンケンの利用した表で「再生産総額」5000リーヴルという範式の100万分の1の規模の，一般的に言えば，社会的総資本の再生産の100万分の1の規模の再生産を取扱っていた。ケネーは原表において，経済的社会諸階級の平均的代表者，従ってまた彼における社会的総資本の2大区分の平均としての2個別資本を想定し，社会的資本の再生産過程を，これらの代表者間の，従ってまた2個別資本間の流通を媒介とする，これら2個別資本の再生産過程として描いていたのである。言うまでもなく，原表のかかる形式は，社会的資本の再生産過程を解明するという目的にとっては，正しいものではない。しかしこれは，個別資本にとってのみ妥当す

24) Mirabeau, *op. cit.*, p.105.

ることを社会的総資本にとっても当てはまるものとした上の誤りを容れるには，全く相応しい形式であったと言うことができるのである。

もちろん，原表の主張は，単に上に述べた誤解だけから生じたのではなかった。それは，また，ケネーが「支出」の範疇によって，はっきり区別すべき2つの概念，すなわち支出と投資(「前払」)とを混同して把えていたことから生じたのである。支出は，貨幣(所得)を個人的消費の目的で消費資料の購入に投ずることを意味するのに対して，投資は，一般に貨幣(資本および所得)を価値増殖のために資本として投下する。だから産業資本について言えば，貨幣を生産的消費の目的で生産的諸要素(労働力と生産手段)の購入に投下することを意味する。ケネーは原表においてこれら両者を明確に区別せず，それらを共に「支出」としてむしろ前者の範疇において混淆して把えていたのである。すでに見たように，原表は2つの基礎的前提の上にうち建てられていた。その第1は，地主以外の階級はその「支出」において地主の支出の風習に従うのであり，従ってあらゆる階級の「支出」はつねに地主の支出と同一比率で生産不生産両階級の間に分割されるということであり，第2は，生産的階級の手に渡った貨幣は，そこで全額投資され，この投資額の回収部分とそれと同額の「純所産」とを含む「富」を再生産するということであった。この第1の前提は，生産不生産両階級における「前払」すなわち投資をこれら両階級の個人的消費のための支出と混同することから生じたのである。これら両階級における「支出」を主として規制するものは，決して，原表で主張されているような個人的消費性向ではない。たとえ彼等が地主の支出を模倣するとしても，それは彼等の支出のほんの一部を変えるにすぎないのであり，彼等の「支出」は，殆んど個人的消費とは無関係な生産上の技術的条件によって決定される。従ってあらゆる階級の「支出」は地主の支出と同一比率で生産不生産両階級の間に分割されるとする第1の前提は，成り立ち得ない。さらに，第2の前提について言えば，それは，第1の前提の制約から来た誤解であったと言うことができる。農産物への支出すなわち農産物の販売代金と農業生産者の「年前払」とが量的に一致するものでないことは，農業生産者の「原前払の利子」を考慮外におくとしても，その販売代金のうちより地主に対して地代を支払わなければならないことを考えてみれば，明らかである。だからかかる支出と投資との量的一致の仮定は，農業生産者の総生産物の販売とそれに基づく地代の支払や再生産の諸条件の準備等が全体的に考慮されることになれば，解消せざるを得ない。しかしかかる全体的考慮は，第1の前提によって阻まれていた。各階級の「支出」がつねに同一比率で生産不生産両階級の間に分割されると仮定する限り，社会的資本の再生産過程は不完結に終らざるを得なかったからである。

以上われわれは，原表に表示されているケネーの思想内容の誤りの所在を明らかにした。かかる誤った思想に導かれる限り，社会的資本の再生産過程は必ず不完結に終らざるを得ず，その全連関の合理的追求は放棄されざるを得ないのである。もちろん，理論は合理性を要求される。原表における社会的資本の再生産過程も，その完結，すなわちその全連関の解明を要求されざるを得ない。実は，原表は，すでにその創案者のもとで，裏面の流通の補充により合理主義的に解説されていたのである。しかしこのことは決して，かかる合理主義的解説が原表の正しい解説であることを意味するものでなかったことに注意しなければならない。むしろ反対に，原表は，かかる合理主義的解説によって，その本来の構想から離脱し，誤謬と非合理性に基礎をおく原表自身の解消に進まざるを得なかったのである。われわれは，原表から範式への移行を，正にかかる過程にほかならなかったと考えているのである。

V

原表の合理主義的解説は，経済表の解説を目指して，ケネーの協力のもとに書かれたミラボーの『農業哲学』において始まる。原表において社会的資本の再生産過程を不完結たらしめている主な問題点は，不生産的階級によって工業製品の購入のために自階級内に支出された貨幣が，その階級に滞留して生産的階級に還流しないことである。

ミラボー(＝ケネー)はこの貨幣部分についてこう述べていた。

「同様に，不生産的階級に関して言えば，その自階級内消費の支出のため，およびそこで製造される製品の原料の購入を継続的に更新するために，そこに残るように見える半額，この半額は，と私は言う，国民の生産物或は外国の生産物の総体の中から取られた原料のこれらの貯蔵に対してつねに使われる年前払の元本をそこで維持するのである。そしてこれらの原料の継続的購買によって，保持されているかに見えるこの同じ半額も，やはり絶えず流通して，すべての富の源泉である生産的階級に帰って行くのである[25]。」

これではまだ全連関ははっきりしないが[26]，とにかく不生産的階級にとどまるかに見える貨幣は，原料の購入によって生産的階級の手に還流するのだというのである。もちろん，このような還流は原表には表示されていない。ミラボーによれば，それは，「読者の頭をこんがらがらせるように表を見た目に複雑にせずには描くことのできなかったであろう諸通路を通って[27]」行われるのであり，「それ故ここでは，理解力で機関を補って，吸収されてしまったかに見えるこの部分の返還を仮定しなければならない[28]。」すなわち，彼はここで経済表に裏面の流通を仮定しなければならないと言っているのである。このような裏面の流通が仮定されれば，社会的資本の再生産過程，経済の循環過程も，もちろん，完結する。すなわち，単に不生産的階級における再生産が可能になるだけでなく，生産的階級はその生産物を全部販売しつくし，従って地主によって最初に支出された貨幣はすべて生産的階級に還流し，再び地代の支払，そして次年度における同じ過程の繰返しが可能となるのである。ミラボー(＝ケネー)はこの点について次のように述べている。

「貨幣は，あらゆる決済によって，最後にことごとく生産的階級によって集められるのであって，生産的階級はそれを地主達に，彼等の収入の支払のため，また生産的階級が再生させた新生産物の購買を流通によって新たに再開させるために，再び返すのである[29]。」

さて，原表はこのように裏面の流通の補充によって一応合理的に解説された。しかしかかる合理主義的解説によって，原表は，まず第1に，表現様式として全く不完全，不適当なものとなる。それは，裏面の流通を表示した完全な表現に代えられなければならないのであり，また個別資本の相互絡み合いによる不完結な社会的資本の再生産過程の表示から，社会的総資本の再生産過程の表示に代えられなければならないものとなる。第2に，原表に表示されていた思想内容が成り立ち得なくなる。一切の貨幣が窮極的に生産的階級に還流するとなれば，それが還流しないということを基礎として出てきた「生産的支出」と「不生産的支出」という支出の区別も消え去らなければならないのであり，また，この区別を土台にして出てくる，地主の支出の如何が，再生産の如何を，その単純縮少，拡大の相違を決定するという原表の根本思想も消え失せることになるからである。同時にまた，第3に，生産的階級に廻流した貨幣は，すべて「年前払」として投資されるという馬鹿げた仮定も放棄されなければならなくなる。かかる貨幣の一部は少くとも地代として地主に支払われなければならないからである。最後に第4に，各階級の「支出」はつねに何らか一定の比率で生産不生産両階級の間に分割されるという基礎前提も崩壊することになる。従ってまた，生産不生産両階級の間に一定の比率で繰返し分割されながら，最後の1ソルに至るまで続けられるこれら両階級間の相互流通の形式も消滅しなければならないのである。要するに，原表そのものが解消しなければならなくなり，『経済表』は，社会的資本の再生産過程の表示としてなお残るとすれば，原表から範式に変らなければならないものとなるのである。

25) Mirabeau, *Philosophie rurale ou économie générale et politique de l'agriculture*, Tome premier, à Amsterdam, 1769, p. 57.

26) ミラボーは「自階級内消費の支出」について，別の個所で，同じ階級の人々が「相互に購買し合」うのだと説明している。(Cf. *ibid.*, p. 89.)

27) *Ibid.*, p. 56.

28) *Ibid.*, p. 56—7.

29) *Ibid.*, pp. 55—6.